

カントウータ

Cantuta No.7

平成 17 年 6 月 7 日発行
(社)日本ボリビア協会

協会からのお知らせ

鎌田副会長がお亡くなりになられました

当協会副会長鎌田甲一様は4月24日肺がんでご逝去されました。宇宙線物理学者としてボリビアのチャカルタヤ宇宙線観測所で研究していたため、ボリビアに深い愛情を持ち、昭和45年「ボリビア友の会・慕友会」を作り、「文集・アミーゴ」を数回発行しました。それが現在の「カントウータ」に引き継がれ、発展しています。大事な方を失い、その死は惜しまれてなりません。衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。合掌

シーレス・ボリビア外務大臣来日 協会主催昼食会開催

ボリビア共和国外務大臣ファン・イグナシオ・シーレス・デル・バジェ外務大臣が外務省の招きで来日し、3月16日JETRO・JICA等を訪問された後、国際文化会館において当協会役員と昼食を共にされ、友好をあたためられました。

ダブドゥ・ボリビア国大使夫妻も出席されましたが、同夫人はNHKのスペイン語講座に出演されるとのことでした。

ファン・イグナシオ・シーレス・デル・バジェ外相の横顔

シーレス外相は両親がともに歴史学者です。母親はチリ人で、10年以上前に

亡くなっておられます。父親は、外交官(歴史の教授を勤めた後)として、在パチカン大使および在サンチアゴ総領事を務められました。現在、ボリビア歴史学会会長。シーレス外相はチリで生まれましたが、父親と同じボリビア国籍を有しています。シーレス外相はチリの知識人とも良好な関係を有しています。シーレス外相の両親は、外相を敬虔なキリスト教徒になるよう教育するため、イエズス会系の高校を選ばれたとのこと。シーレス外相の夫人の父親(マリオ・ロロン・アナヤ)は、民族民主行動党(ADN)の創始者の一人であり、第一次バンセル政権の外相を務めております。

シーレス外相は、高校および大学において成績優秀でしたが、特に文学に対して強い関心を寄せています。シーレス外相は、静かでバランスの取れた性格であり、正直で責任感が強く、常に職場の同僚たちに敬意を払う方です。

シーレス外相は、ジャーナリズムにも強い興味があり、全国道路サービス局(公共事業省の所管)のプレス部長を務めたり、様々な新聞のコラムニストや編集員として働いたことがあります。また、文化に対する関心も高く、ラパス市の文化評議会の委員も務めました。さらに、教育相の教育技術サービス班の班長として教育改革にも携わりました。

最近、ソニア夫人が、4番目の子供を出産されましたが、シーレス外相は、「もう自分がおじいさんになったように感じる」と述べていられる由。

シーレス外相は、父親が住んでいた邸を引き継いで住んでいますが、同邸は、

在ボリビア日本国大使公邸の向かい側にあり、幼少の頃より、何人もの日本大使を知っておられる由。また、2002年にFEALACにヤング・リーダーズ・シンポジウムで日本を初めて訪問し2週間の滞在の中で大きな感銘を受けたと述べられています。日本の文学、映画、音楽など一般に思われている以上に日本事情に通じており、例えば、日本の映画については、黒澤明監督の作品が好きであり、「生きる」「どですかでん」及び「デルス・ウザーラ」など黒澤作品はすべて鑑賞されている由。文学についても、三島由紀夫及び川端康成の作品を英語版もしくは西語版で読まれているとのこと。

ボリビア大統領 IDB 総会に出席

去る4月10日から47ヶ国からの参加を集めて、沖縄県宜野湾市の沖縄コンベンションセンターで開催されたIDB(米州開発銀行)の第46回総会にカルロス・メサボリビア国大統領も出席し、民族間の対立・麻薬テロ・貧困等から来る政情不安を安定させるためにも経済発展の重要性を強調しIDB加盟国の協力を訴えた。また沖縄県との移住による友好関係にも触れ、強い絆を意識されていることを感じました。(渡邊)

中南米諸国日系人若手リーダー東京会議開催

去る1月25日(火)外務省中南米局主催による「中南米諸国日系人若手リーダー東京会議」が開催されました。中南米各国から招聘された日系人若手リーダーによる現状報告、問題提起がされ、関連諸団体の代表、研究者による活発な質疑応答が交わされました。

ホームページの試作ほぼ完成!

長年の念願であったホームページの立

ち上げについては、細萱恵子新理事の尽力により、試作ページがほぼ完成しました。大変よい出来栄ですので、詳細を詰めた上で、出来るだけ早く公開に踏み切ります。またそれを運用する通信費も値下げ等により維持可能な見込みも何とか立ち、また映像等を配信するだけの能力を有するパソコンについても借用できました。

ボリビアの話

遺伝子組み換え大豆摘発

サンタクルス市より270キロ北部に行ったサン・ペドロ農場で遺伝子組み換え大豆の栽培が発覚し一時は大きな騒ぎとなった。ボリビアでは遺伝子組み換え大豆の栽培は許可されていないことから違法栽培となり、政府は関係省庁から人を派遣して対応させた。政府の方針としてはこの大豆を焼却するか遺伝子組み換えを認めているアルゼンチンかブラジルへ輸出させるといったコメントを出していたが、そうこうする内に大豆の主は週末の夜間に数台のコンバインを導入して収穫し、密かにSAO製油会社へ運び込んだ。メディアの報道で関係機関は3台だけ製油会社へとか8台だとかあいまいな返事となり、結局はSAOのサイロに貯蔵して今後の対応策を考えることとなった。うやむやになる可能性は大きい。ANAPOは遺伝子組み換え大豆の試験栽培を許可して欲しいと政府に申し入れていたが、今回の騒ぎで小面積での試験栽培にゴーサインが出た模様。

ボリビア産の鶏肉・日本に輸出

鶏肉加工業のIMBA社は、プロイラーの日本市場輸出計画が進行中で近日中に商談が成立すれば、週50トンの鶏肉をアメリカ港経由で初荷として輸出される予定。日本は週当たり2000トンを要求。同社は12月にさらに大規模な屠殺場の完成が予定され、操業が開始されれば月5000トンの輸出が可能となると発表した。

ボリビア百話

全国統一市長選挙 サンファン市長に伴井勝美氏

2004年12月5日、全国統一選挙が実施され、全国的に327名の市長が選出された。サンファン市独立初の市長選に伴井勝美氏(1966年サンファン生まれ)が当選。サンファン出身の二世が出馬したことにより、今まで投票をしたことがない大勢の高齢者の方々も選挙人登録をして投票。予想以上の票数を獲得、全国でも数少ない過半数突破の結果で市長の座を得た。伴井氏のコメントは

「2005年はサンファン日本人移住地にとって入植50周年という節目の年に当たり、これに並んでサンファン市発足の年に初代市長として就任することは真に光栄なことであり、これまで以上に努力しサンファン市民とともに21世紀のサンファン市が明るい幸いあふれた故郷であるように全力を尽くしたく思います。」

サンファン入植50周年記念碑

2005年サンファン入植50周年を祝う事業の1つとして記念碑の設計が決定され、移住者の名前を刻む記念碑へ壁画制作にサンタクルス在住の彫刻家ロルヒオ・バカ氏と正式に契約をした。バカ氏のデッサンは、出港、炊き出しをしながらの汽車の旅、牛車を引いての農業、そして中央には移住者の父、ビクトル・パス元大統領が描かれている。全体の大きさは巾1.7m×高さ5.5m、上部に移住史を描いた焼き物の壁画で、巾1.2m×高さ2m、土台部分は高さ95cmの大理石に移住者の名前を刻み、K&K社藤井憲治氏が製作。設置場所は文化交流会館の若槻氏像とテニスコートの間。完成は7月の予定。

バカ氏はボリビアの著名な彫刻家で、スペインなどの様々な国際展示会に出品し、サンタクルス市のアレナル公園やコレヒオ・アレマンにも人物や風景を描いた焼き物の壁画が設置されている。

産業革命の進展とゴム 需要の激増

- その4 -

高畑敏夫
元ボリビア大使

他方、1830年にリヴァプール、マンチェスター間および米国のチャールストン、オーグスター間の鉄道が開通し、その後各国で鉄道建設が進められている中で鉄道車輛のバンパー、アブソーバーなどの製造のためゴム需要が激増した(米国では1840年に2800マイルの鉄道網を有していたが、1860年には30626マイル、70年には52922マイルに達した。大陸横断鉄道の完成は1869年である。)因みに、米州で最初に完成した両洋間鉄道は1855年に開通したパナマ(当時はコロンビアの一部)のパナマ鉄道(ferrocarril de panama)で、時あたかも米国西海岸におけるゴールドラッシュの時期に当たったため、大いに繁栄した。そして、その5年後の1860年(安政7年=万延元年)には、江戸幕府の外国奉行新見豊前守正興を正使とする遣米使節団が米国の軍艦ポーハタン号でホノルル、サンフランシスコ経由4月にパナマに到着し、この鉄道で地峡を横断してカリブ海岸に到着し、同地から米艦ロアノーク号に搭乗して米国に着いている。なお、一行は帰路は喜望峰、インド洋廻り航路をとっている。

自動車は1883年から86年頃の間ドイツのダイムラー(Gottlieb Daimler 1834~1900)とベンツ(Carl Friedrich Benz 1844~1929)により発明されていたが、奢侈品とされ、需要が伸びなかった。米国では1895年に自動車工業が起こり、同年グッドリッチ社が自動車用タイヤの製造を開始した。1903年にフォード(Henry Ford 1863~1947)がフォード自動車会社を設立し、1908年には1台850ドルのT型フォードを発売したが、さらに1913年にはベルト・コンベアーによる組

み立てライン方式を完成し、1927年までモデルチェンジを行わず、価格は300ドルまで下がった。しかし、同年には大衆に飽きられたT型フォードの製造を中止し、GMのシボレーに王座を譲った。

ゴムブームの到来

これらにより弾性ゴム利用の工業が飛躍的に発展することになり、アマゾンのゴムの生産量は驚異的な増大を示し、1821年の31トンから1857年には2600トンに達した。ゴム需要の激増によりアマゾン地域には未曾有のブームが押し寄せた。19世紀のマナオスはバラと呼ばれる小部落に過ぎなかったが、ラテックスを燻製する技術が開発され、輸出が可能となったため、水深の深い同地は1833年にマナオスと改名されて州都となった。1850年にマナオスがパラに送ったゴムの量は早くも1000トンに近かったが、1870年には3000トン、世紀末には2万トンに、また最盛期の1908年から10年にかけては8万トンに膨れ上がっていた。人口も5万人に膨れ上がり、全長16キロの大通りには南米最初の路面電車が走っていた。ボストンでもまだ乗合馬車が走っていた時代に、マナオスでは電化されていたのである。

マナオスの黄金伝説の象徴的存在となった「アマゾナス劇場」(Teatro Amazonas)をはじめとする3つもの劇場が建設され、オペラが代わる代わる上映された。アマゾナス劇場はイタリア産の大理石作りの桁外れに豪華なオペラ・ハウスで、一旦英国で組み立てられた後分解され、大西洋を超えて運ばれてきたものであった。1897年にはマナオスとリヴァプールの間に蒸気船による大西洋横断定期航路が開設された。

マナオスには及ばないものの、ペルーのアマゾン地帯の中心都市イキトスも人口25000の都会に膨れ上がり、1000トン級の外洋船が入港し、パリの高級ホテルが解体のうえ運ばれて移築された。

じゃがいもの旅の物語

インカからジバングまで NO.7

杉田房子
旅行作家

ジャガイモが積み上げられた山の間を、太平洋の潮風が吹き抜けていく。浜辺には、アンデス中の村から町へ運ばれ、さらにピラコチャの船が浮かぶこの港町へ集められたありとあらゆる品物が、山と積み上げられていた。

けれど、うなだれて荷を運ぶインディオの群れも、怒鳴りつけているスペイン人も、そもそもこの浜辺に寄せている海が太平洋という名の海原とは知らない。インディオにとっては、神であり始祖である白い肌のピラコチャが去ったと伝えられている西の海だった。その海から現れ、白い肌なのでピラコチャの再来と思われたスペイン人は、自分たちがやってきた北のパナマ地峡にまでつづく南の海としか思っていない。

1520年11月、インカの皇帝が支配するアンデスの南の果てを、帆船で大西洋側から抜けた航海家マゼランが、太平洋と命名したこの海のことを、スペイン本国とヨーロッパでようやく知られ始めたにすぎなかった。

「筏しかないインディオは、帆船にびっくりしているが、われわれがこの海に十隻と持ってないと知ったらどうすることやら」

港町を見おろす城で、3人のスペイン人が話しこんでいた。

「村長に案内させて、山奥に向かった一隊が帰ってこない事件がすでに起きている」

三人のうちの一人、港町の守備隊長が言うのに、あとの2人の神父と船長が頷く。

黒と白の石そっくりな、腐らない食物を持ってきたインディオの村長は噂の種になっていた。未知の海と大陸に行くスペイン人がいつも苦しんだのは長く保つ食物だが、村長の持ってきた物はそれを解消してしまう。

「村長は、手違いで村人が殺されたのを

大層恨んでいたとか」

神父が言うのに、今度は隊長が頷いた。「物は総ざらい献上し、村人まで殺された上でのことです。あれは仇討ちの策略です。南の産地に金銀があるといわれて、でかけたきりの一隊もいる。金銀ばかりでなく、半年分の食物まで要求したのは成功でした。インディオが言われたとおり物を運んできたのは、われわれを半年で厄介払いしたい一念だったんですな」

「それが居座り続けている。が、いまなら少人数だし、しかも逃げ出す船はろくにないと知ったら…」

船長は肩をすくめた。

「だから、いま徹底的に征服せねばならん」

隊長の強い口調を、神父が引き取り、重々しい口調で言った。

「征服者 - コンキスタドーレスには、異教の神を崇め、壮麗な神殿に人間すら犠牲に捧げかねない彼らを従わせる義務があります。ありあまる金銀財宝を持ち、死も恐れない戦士がいるのを放っておけば、われわれは新しいモロ、バーバリを見かねませんぞ」

スペインが、イスラム教徒とモロ人の支配から回復して半世紀とたっていない。同じイスラム教徒のバーバリ人の海賊が、バーバリが野蛮という言葉になったほど、地中海をあらしまわった恐ろしさを知る船長は苦笑した。

「黄金と、黄金色のパパスとかパタタとかいった食物、それに石のように腐らない食物も積んで、私は早いとこ失礼させてもらいましょう」

スペイン本国の豚飼暮らしにはじまる 50 歳の生涯の、最後を飾る大成功の夢を南アメリカに賭けるピサロ総督も北端のビルー河口に始めて着いたときは、船の食べ物が尽きていた。アルマグロ将軍と一緒に出かけた 2 回目の遠征でも、糧食は尽きている。

ビルーという名の酋長の部落があったので、ビルー河と呼んだ河畔も、密林と湿地で食料は充分でなかった。物欲しげ

な顔の酋長が、もっと南にあるという豊かな国インカの噂をしなければ、二回目の遠征もなく、アルマグロ将軍とルウケ大師教の助けも得られなかったかもしれない。

ビルーがいつの間にかペルーになり、それをインカと呼ぶようになった今のスペイン人は、黄金に取り付かれて、ついこの間まで苦しんだ食べ物のことを忘れていた。覚えているのは古手の将兵や不況の神父に限られかけている。それに、銃を片手に船に残る頭株の船乗りのような男もいた。

「船は風と潮まかせだ。陸を離れれば何ヶ月かかるかわかったものじゃなし。このあたりの暑さと湿気で、長く持つはずの食べ物がだめになれば、やはりお手上げよ。こんどは石そっくりの腐らない食べ物も積んでいるから安心だろうが、飲んで食って大騒ぎの後が怖いって、船乗りたちの歌の教えは相変わらずさ」

黄金握ってバカ騒ぎ
フラつく体で帆を張れば
さざ波一つで船の外
嘆く骸骨 海の底
これじゃ黄金も使えない
(つづく)

ボリビア人が見た日本

ペ - テル・マクファレン
細野 豊・訳

**太陽の帝国日本を訪れる際に
最も重要なのは、新たな世界に
対して頭と心を開くことだ**

日常生活

驚いたことの一つは、日本について人々が持っているイメージとは反対の広々とした空間を見たことであった。東京と日本という国は、人が溢れていて非常に込み合っているというのが、一般的な印象であるが、案に相違して、日本には広大な緑の空間と寛ぎの場があるのだ。仏教寺院や神社の周りがある公園や緑地帯

は、比べるものがないほどの美しさである。オフィスやマンションはとても狭いが、ビルは高層で、広々とした玄関のスペースを持つものが多い。60平米のマンションの値段が最低で50万ドル相当円もする。主要な都市では家賃がとても高く、職場まで着くのに1時間か、それ以上かかる。東京で、運悪く最終電車に乗り遅れた人は、壁に開けた穴のようなホテルに泊まることになる。入浴と食事付きではあるが、更に、日本は清涼飲料、お茶、ホット又はアイスコーヒー、麺類、菓子等の販売機の種類と数量が世界中で最も多い国であるに違いない。

日本人は、仕事と競争で一杯の生活がもたらす緊張について多くを語る。彼らは長時間懸命に働くが、同時に楽しい生活、多彩な食事、観劇、公園の散策、夜の盛り場での楽しみ等を楽しむことを知っている。とは言え、自殺率が異常に高いという問題があることも確かなのだ。

日本は、犯罪、暴力、盗難の比率が低く、おそらく世界中で最も安全な国である。京都の中心街で、あらゆる年齢層の一人が、他国の武力紛争に際して日本の自衛隊を派遣することを認める法案に抗議するデモを行っていた。デモは全く平和的に行われ、他の市民たちに迷惑を及ぼすようなことは全くなかった。

日本を覆っている経済危機は、人々の会話や企業家たちの顧客接待費削減の事実等から見てとれる。かつては、芸者を侍らせたり、主要都市にある高級クラブやレストランへ行ったりするために多額の経費が使われていたのだ。とは言え、東京、京都、大阪等の都市やそこにある商店、レストラン、ショッピングセンターは人で溢れ、市場や商店はあらゆるタイプの特売品で一杯である。

団地の真ん中やビルの脇で稲を栽培しているのを見たが、これは興味深かった。米は多くの料理に欠かせないものであり、日本は消費量の殆どを生産しているが、それ故多くの若者たちがやっかいな田畑での仕事を捨てて、都会へ移り住んでしまう風潮が憂慮されている。

東京で移動するのに最良の方法は、歩くか東京中を走っている電車に乗るかである。電車は清潔で、決められた時刻通りに発着し、出勤や退社の時間には満員になる。渋谷、浅草、銀座等の駅には、多くのレストランや商店が軒を連ねている。とても面白かったのは、殆ど全ての若者たちが電車の中や街で、声での会話が出来るのは勿論のこと、ビデオや写真やチャットを備えたカラーの携帯電話を使っているのを見たことであった。米国でもお目にかかれなような進んだ技術で作られたピンクか薄紫色の携帯電話が急増しているのが分かる。

神社や寺院のこの上ない美しさ

東京から新幹線で2時間の所に京都がある。そこはほぼ千年の間日本の首都であり、文化、宗教、学術の中心であった。この都市には、木造寺院である東本願寺と最も高い仏塔のある東寺がある。三十三間堂は、1、001体の金箔で覆われた木像で有名である。

最も美しい訪問場所の一つは、京都郊外の池の辺にある金閣寺である。また、非常に特殊な場所としては、豆腐料理専門のレストランがある。そこは都市のど真ん中にあるにも拘らず、この上なく美しい庭園に囲まれている。客たちは繊細な藁の上に座り、日本固有の衣服である“着物”を着た女性たちのサービスを受けながら食べる。料理は、胡麻入りの豆腐そして薬味と肉のスープに入れた豆腐である。日本を体験しての大きな楽しみの一つは、美味で多彩な伝統料理を味わうことであった。最も驚いたのは、辛いのも甘いのも実に多種多様な料理があることであった。

京都から42kmのところには奈良があるが、そこも又かつて日本の首都であり、文化、芸術及び宗教の中心であった。奈良公園には、赤い色のこの上なく美しい神社があり、そこには、2千8百の石と金属で出来た灯籠がある。そこで私は日

本の典型的な結婚式を見ることが出来た。

結婚したばかりのカップルが神社から出てきたが、花嫁は白無垢のままことに美しい着物を纏っていた。一人の若者が、新婚夫妻を乗せた乗り物を彼らの車の所まで引いて行った。すぐ近くでは、神主が最新型の車に祝福を与えていた。その光景はどこかコパカバーナで行われていることと似ていた。

すぐ近くには、とても大きな東大寺があり、8世紀に鑄造された重さ452トンもの大仏が、現存する世界最大の木造建築物の中に置かれている。信者たちはそこへ入る前に、仏の祝福を受けるため、線香の煙を身に浴びる。それらの神社や寺院は奈良公園内にあるが、この公園はそこを訪れる人たちの間を歩き回って餌をもらう何百頭もの鹿がいることで有名である。

日本のティティカカ湖

京都からさほど遠くない所に琵琶湖がある。日本で最大の湖で、その辺には国連や湖沼保護部門のプロジェクトがある。所長の中村氏も含めて、この湖で働いているチームの重要な努力目標は、この地域の環境バランスを維持することである。琵琶湖の水は一つの川となって流れ出すが、この水は京都、大阪等の都市へ飲料水として供給されている。

私は、この湖の辺にある旅館と呼ばれる純日本式の施設に泊まったが、そこでは靴を脱ぎ、西洋の習慣を捨てて日本の伝統の世界へ入るのである。浴場は男性用と女性用に分かれており、入浴する前によく身体を洗ってから共同の浴槽に入るのである。浴槽の底は、数多くのセラミックで出来た床になっていて、疲れた足を摩擦するのに最適である。

旅館から外出するときも、中にいるときも、宿泊客たちは“ゆかた”と呼ばれる部屋着を着る。床には、藁の一種で出来た“たたみ”が敷かれている。客は夜になると、従業員が敷いてくれる“ふと

ん”で眠る。食事は信じられないほど豪華な日本料理である。日本には、この種の宿泊施設が7万軒以上もある。

県は、壮大な博物館を建設し、アメリカ大陸発見以前の歴史や現代史や琵琶湖の地質学的歴史を甦らせている。ティティカカ湖や世界の他の重要な湖についての親しみやすい展示も行われている。我々の聖なる湖の辺にもこの位の博物館を作ったら素晴らしいのではなかろうか。

(終わり)

(注)コパカバーナ=ティティカカ湖畔にある聖地。コパカバーナの聖母が祀られている。

この記事は、ボリビアの雑誌“OH”(03年7月27日付)に発表されたものです。前号と本号の2回に分けて、全文を掲載しました。

沖繩移民の父

ビクトル・パス・エステンソロ

- その1 -

勸葉芳一
猫野滋磨

300年余りの植民地時代から独立を経てボリビア共和国が誕生した1825年8月6日から15年経った1840年頃、パス家の一族4名が南部のタリハに定住した。この一族は1830年アルゼンチンの同盟で活躍したホセ・マリア・パス將軍と血縁関係にあった。時は移り20世紀後半、このパス一族は2名のボリビア大統領を誕生させた。この一族が輩出した大統領はボリビアの歴史を変えた1952年の革命を指導して大統領へ就任以来、40年にわたる政治生活で大統領職を4回務めたビクトル・パスエステンソロとその甥に当たり、1989年に大統領に就任したハイメ・パス・サモラである。ボリビアの変革期において常に国民に指針を与え20世紀最大の政治家と称され、そして移民の父であるエステンソロ(1907-2001)はどのような人物だったのであろうか。

ビクトル・アンヘル・パス・エステンソロは1907年10月2日、植民地の面影が残るタリハ県のサンベルナルド・デ・ラ・フロンテラの裕福な家庭に生まれた。父はオルコの銀行員で参議院議員だった。幼少よりベルヌ、デュマ、アミシス、バルザックなどの小説を読んで過ごし、1917年にタリハのナショナル・デ・サン・ルイス校へ入学、15歳のときにオルコのボリバル校を卒業した。この学生時代に錫鉱山で働く鉱夫の生活を目の当たりにして感銘を受けた。奥底暗い坑道へ入って過酷な作業を埃だらけになって繰り返す鉱夫たち。その見返りははずめの涙ほどの給金であった。この当時の鉱山だけでなく共和国を支配したのは「ラ・ロスカ」と呼ばれ、政財界を牛耳っていた三つの同族財閥(パティニョ、アラマヨ、ホスチルド)であった。この後、ラパスのマヨル・サン・アンドレス大学へ進学し、1927年、25歳のときに弁護士の資格を取得し、国家統計局に勤務、また政治経済の教師も勤めた。1932年チャコ戦争勃発の時には会計参与としてセレメ隊に従事した。ボリビアの歴史では資本主義の欲望を満たすための戦争が二度起こっている。ひとつは海岸のサリトレ(硝子)をめぐる発生した1879年から83年までのチリ対ボリビア・ペルーのいわゆる太平洋戦争、そして石油をめぐるチャコ地方での1932年から35年までのパラグアイ対ボリビアの争い、チャコ戦争である。この二つの戦争によりボリビアは太平洋沿岸とチャコ地方の広大な地を失った。チャコ戦争に従軍したビクトル・パスは軍人参謀によって指揮されるボリビアの兵隊の多種多様さに目を見張る。アルティプラノ(高地)、パーリエ(渓谷)そしてヤーノス(平原)から集まった兵士達にこれが同じ国の国民かと驚愕した。この戦争は終結までにボリビア人5万人、パラグアイ3万5千人の戦死者を出した。この戦争終結の仲介を果たしたアルゼンチンの外交官はその後ノーベル平和賞を受賞している。

チャコ戦争の英雄で戦争終結後、大統領となったサンタクルス出身の軍人ヘルマン・ブッシュのもとで経済顧問や1937年にパティニョの会社の弁護士となるものの1年で辞退し、政界に入る。170センチの身長で品の良い衣服をまとい、少々度の強い眼鏡の内からは落ち着いた中にも威圧的なものを感じさせる視線をおくった。この時期、四期連続で議員を務めた。議会では左翼のブロックを構成し、独立的社会と名乗りその後の政治に影響を与えることになる。政界では目覚ましい活躍を見せたものの、私生活は目立たないものであった。若くして妻を亡くし、酒、タバコをやらず、ましてや社交界に入ることもなく、馬で自然を散策する程度であった。読書に親しみ、特に経済書やボリビアの経済統計を研究するのを趣味としていた。

チャコ戦争の終結はボリビアに新しい革命思想を芽生えさせた。これまでの一部階級の特権だった民主主義から大衆への民主主義の変換、社会公正の保障、国家主権を強力にすることを旗手に掲げた。

1942年6月7日、著名な政治家や有識者とともに革命国民運動等(MNR)を創立、反帝国主義を骨子とし、左翼派は組合や農民を救済する立場をとった。この時期ペニャランダ大統領(軍人)のもとで経済相に勤めた。1943年12月20日、RADEPA(国家の道理)とMNRが中心となってクーデターをおこしグアルベルト・ビヤロエル(軍人)が大統領へ就任する。この政権下で1943年から45年まで大蔵統計相を勤め、中心的な役割を果たした。ビクトル・パス自身によると「ビヤロエル大統領は支配階級の経済利益とは何ひとつのつながりも持たない最初の大統領であった。その姿勢は平民階級を庇護することで支配階級の怒りを買うことになり、国民解放の戦いは殉教者を出すに至った。1946年7月21日、反革命軍は大統領官邸へ押し入り大統領をその地位から辞任させた後暗殺、ラパスの中央公園へ吊るした。ビクトル・パスへも追及の手が伸び、ファン・

ドミンゴ・ペロン大統領統治下のアルゼンチン国ブエノスアイレスへ亡命する。亡命生活は1946年から52年までの6年間に及んだ。この時期はMNRが地下組織としての思想を普及させた時であり、1952年の革命への序章を奏でた時でもある。この時期にアルゼンチンでビクトル・パスはペロン大統領やエクアドルから亡命していたベラスコ・イバラ元大統領、そのほか際立った思想家や活動家と出会い、友好を結んだ。

リレー随筆第1回

人のおいであふれていた ボリビア

佐藤 葉

押し寄せるざわめき

薄闇がざわめいている。朝6時半。南半球は冬である。吐く息が白い。

目を凝らして、ざわめく波を見つめる。薄闇の底で、その間に溶けそうな褐色の肌をした先住民たちが、車の間を右に左に斜めにとてんでに道路を渡っていく。口元はきゅっと結び、時間に追われている様子だ。どうやら、ラパス市内に働きに行く人々のようである。

ところどころに行列ができており、女性たちの姿もある。そこへ警笛を鳴らしてバスが来た。すしづめだ。行列の人は、なおも乗り込む。ワゴン車のミニバスも来る。若者が窓から行き先を怒鳴っている。トラックが来る。荷台は鈴なりの人である。

警笛と怒鳴り声と大型車が行き交う騒音が標高四千mの薄い空気を揺さぶり、それが熱い渦となって押し寄せてくる。薄闇の中の喧騒。寒さの中の熱気。うごめく人々の体から立ち上るエネルギー。

日本から飛行機を乗り継ぎ、ボリビアの街に立ったとたんに広がった光景である。軽いめまいを覚えた。これまで、何カ国かを旅をし、アメリカ・カリフォルニアには夫の転勤で3年住んだ。日本を一步はなれるといつも、民族、文化など、目新しいものが多く、わくわくしたもの

だ。だが、ここでは、まったく異質な世界に来たという思いが胸に迫ってきた。

山と積まれた農産物

日曜日のラパスの朝市には、唐辛子をはじめとするスパイス、米、豆類、肉、魚、衣類、ほうきやバスケットなどの雑貨類、花売りに野菜や果物は山と積み上げる。路地は人の波だ。食料の多さ、豊かさには目を見張るほどだった。コチャバンバのジャガイモ卸売市場には、赤や黄色、大小さまざまなものが一面に並んでいた。人の腰まである袋一杯で約15ドルだ。即座に、このジャガイモ1袋を担いで帰りたい、と思った。日本の食料品がいかにか高いか再び思い知らされた。

ジャガイモは、アンデス地方に源があるという。そのアンデス山中へ出かけた。高地はなだらかで、敵が見られる。土は黄土色だ。冬のせいか草も枯れて、一面褐色の荒野のように見える土を、営々と耕してきた人々がここにいる。

「自分たちが食べるために作物を作り、余ったらそれを売る。そこに留まってしまっても、国を富ませるために働くのではない。それがこの国の問題なんだ」と、ある企業の社長が言った。彼は、食事の最中でも突然仕事の電話をかけはじめのほどで、ワーカホリックと定評がある人だ。

国を憂い、国を強くしたいという思いは、ある人には軍事力を意味し、ある人には政治、またある人は企業活動に託す。一市民の私は、あまり国のことを考えずに、自分の生活と人生を考えて仕事をやる。それでも、もし私が農業を営んでいたら、よりよい品をよりたくさん作るうとするだろう。ジャガイモ市場にも、朝のエルアルト市にも、人々の熱気があった。

一方、商品に目を向けると、ブラジルからインスタントコーヒーなどの食品を、アルゼンチンからは缶詰や瓶詰めの食品をはじめ、薬や工作機械まで輸入している。旅の途中でうっかり生野菜を食べ、私はひどい腹痛と下痢に襲われた。その

ときに病院でもらった薬が、アルゼンチン製だった。工業国を目指し、国民もその路線でまい進して来た日本に生まれ育った私は、薬も輸入品であることにずいぶん驚いた。

町を案内してくれたアレハンドロさんに、果物も野菜も豊富にとれるのだから、自分の国で缶詰にできないのだろうかと思ねた。

「新鮮なものが手に入るのに、缶詰なんか買わないよ。それに、人口が八百万弱だから、市場として小さいんだ」と少し物悲しそうに答える。では、たくさん作って周りの国へ輸出すればよいのではないだろうかと思ねたと重ねて質問すると、

「ほかの国の方が強すぎて、競争にならないんだ」と、これも無理らしい。私は日本の米を思い浮かべた。農家の人々は米を作りたいのだから減反などせず、他の国へ輸出すればよさそうなものだが、日本での生産はコストがかかりすぎて、他の国と競争にならない。

アメリカ的生活を追ってきた日本は、バターもジャムもケチャップもマヨネーズもアメリカを追い、日本で作り出してきた。日本人の食生活は変わったし、日本は工業国となった。豊かさを享受しているように錯覚しがちだが、じつはいまや農産物を輸入している。生命を維持するための元になるものを外国に頼るといふ、谷川にかけられたつり橋を渡っているようなものだ。

農産物が豊富なボリビアには、豊富だからこそ農業国としてしっかり根を張ってほしいと思ねている。 (おわり)

次回：佐藤様よりバトンを国本伊代様にとのご要望がありました。国本様よろしくお願い致します。

筆者：ノンフィクションライター
数回の南米旅行の折にボリビアに立ち寄りファンとなる

総会の開催予定と会費納入のお願い

年次総会の開催を6月下旬に予定しております。追って会員の皆様に総会案内

を送付申し上げますが、今回カントウータと共に納付書を同封させていただきました。

例年どおり個人会員は一口 3,000円
維持会員は一口 30,000円
です。財政が逼迫しております中で、ホームページ等を立ち上げていかなければなりませんので、出来るだけ多くの口数でのご協力をお願いいたします。

編集後記

今回から「リレー随筆」がスタートしましたが、そのスタートにふさわしいすばらしい随筆を佐藤葉さんからお寄せいただきました。最初の方が次の作者を指名し、次々にリレーする随筆はどんな顔ぶれに、どんな内容かとても楽しみです。ボリビアで体験なされたことなどお書きになってください。原稿は800字から1200字でお願いします。

ただしそれではもの足りないという方は事前にご相談ください。

なおパソコンを利用できる方はワープロで原稿を作成し、E-mailまたはフロッピー、メモリースティックなどでお送り下さると大変ありがたいです。

題材はボリビアでの体験やそれに基づくご意見、滞在中に感銘を受けた話などで結構ですが、お差支えなければ自己紹介の意味でボリビアとの関わりを数行お書き頂いた上で本題に入っていただくとありがたいです。

カントウータは7号を発行できました。年2度の発行なのでゆっくり編集できると思っておりましたのに、あっという間に発行の日が迫り、結局、最後はバタバタ慌ただしくなっていました。

(編集委員)

杉田房子委員長、大貫良夫、細野豊
渡邊英樹

(広報委員)

長嶺為泰、細萱恵子